

世界
柔道81kg
級

永瀬貴規

「鬼門」克服
悔しさを晴らす

金

カザフスタンで行われた柔道アスタナ世界選手権大会において、永瀬貴規選手(体育4年、長崎・長崎日本大学)が個人戦、団体戦両方で金メダルを勝ちとり、二冠を達成した。81kg級は、現階級制に移行してから唯一日本勢が勝てなかった階級だった。「鬼門」と言われるこの階級での金メダルは、まさに歴史に残る快挙だ。

初めて臨んだ昨年の世界選手権では、悔しさの残る5位に終わった。永瀬選手は、そのこともふまえ今回の優勝について、「昨年の5位という結果から反省すべき課題が見つかり、その課題を克服することと、一年間頑張ってきた。優勝したことで、やっていたことが間違っていないということを確認することができたのでよかった」と振り返った。

昨年と今年とは、どういった点に変化があったのだろうか。「昨年は少し自分の意識が足りていなかった。これだけ準備していたら大丈夫かなという甘さがどこかあったのかもしれない」という。その結果が5位だった。今年は、やり残したことがないようにしかり準備し、相手の研究や自分の柔道を見直すことに精力を注いだ。「準備という面では昨年とは違った」と永瀬選手は振り返る。

今回の優勝は、昨年の対戦で敗れている世界王者2人に勝利を取って勝ち得たものであるという。これは特筆すべきだろう。グリンパのチリキシビリには、昨年の対戦で最初に指導をもらい、その後相手のペースのまま試合が終わってしまった。その反省を活かし、「最初の1分を自分のペースでできるように」ということを意識して、相手の研究などを行った」という。フランスのピエトリには、「昨年

バックでやられたので、バック対策を特に行った」という。81kg級という、パワー系の外国入選手が多数集まる階級だ。そのパワーの中で勝ち続けることは容易ではないかもしれない。永瀬選手は、「パワーも大切だが、パワー勝負だと外国入選手に勝てないと思う。その差をトレーニング等で埋めつつ、外国入に勝る相手や技の技術を身につけることで、勝つという意味で今回の優勝は、この年間の努力に対する自信の裏付けとなったに違いない」。

この優勝を機に、世界から本格的に研究・対策される立場となった。このことについて、「研究されても勝てるように、筋力面でも技術面でもすべて、総合力を上げないと勝てないと思うので、今までの努力よりもさらに努力したい」と、さらなる成長を誓った。

昨年金メダルを獲得した団体戦でも、危なげない戦いで日本連覇に貢献した。昨年の0-1と負ければ日本の敗退が決まってしまう場面での試合で経験した永瀬選手。その経験からか、今年の団体戦は「どんな形でも1点とって次の人に回したい」という思いで冷静に戦えたという。個人戦は自分と相手との戦い。だけど団体戦の場合は一人で勝つことはできない。チームみんなで勝ていこう、というところがいい意味で楽しく試合ができた要因だと思ふ」と話した。着々と経験を積み永瀬選手の、地に足のついた戦いで勝利だった。

永瀬選手の大きな目標は、オリンピックで優勝することだ。4年に一度しかないオリンピックがもう来年に迫っている。オリピックで優勝するために、「体を鍛えつつ、自分の弱点を克服

し、長所を伸ばしていきたい」と語る。「それができればオリピック優勝も夢ではないのかな」と思っている。

一年前の取材時、永瀬選手は目標とする柔道について、「見ている人を喜ばせる柔道。応援したくなるような柔道家になりたい」と話してくれた。勝負の世界で生きる柔道家として、この考え方は少し異色かもしれない。「自分は他の人みたいに技がきれいでもないし、ビッグマウスでもない。それよりも見ている人が楽しい柔道をしたい」と思っている方が強いのだと思う」と説明してくれた。常に自然体で話す永瀬選手。柔道で完結するのではなく、柔道を利用して見ている人を喜ばせようという、一歩先に目標を置いているところが、本当の強さの秘密なのかもしれない。

柔道は勝負がわかりにくいスポーツだ。「指導」や「有効」などのポイントによって試合が進んで行く。その点、一本勝ちというのには見えていないものもありやすく、面白いものである。「見ている人を喜ばせる」とことを目標とする永瀬選手が目指すのは、やはり一本を取る柔道だ。オリピックの舞台で本勝ちを重ね、見ている人が楽しめる柔道をしていくことを心から期待する。

最後に、「オリンピックの出場権を勝ちとるのはもちろんだが、そこで勝つための準備が、そこで勝つための準備が、努力をして、今までお世話になった親や先生、先輩後輩同期たちに勝って恩返ししたい」と力強く話してくれた。この想いを胸に日々練習に励むのだろう。世界王者になってもなお、謙虚な姿勢で向上心を忘れず努力する永瀬選手を、これからも応援し続ける。

(藤原真梨子)

編集後記

こんにちは、編集長の鈴木です。学園祭、スポデーを終え、季節はすっかり冬になりましたね。各サークル、部活動も代替わりの時期かと思いますが、かきう筑波スポーツ編集部も代替わりを迎え、私が編集長として発行する筑波スポーツは今号が最後となります。私事で恐縮ですが、これまでのバックナンバーを眺めていると、筑波大には素晴らしいスポーツ選手が、なんにもたくさんいるのか、と感慨深く感じます。読者の皆様、そして編集部員の方々に感謝したいと思ひます、本当にありがとうございました。皆様のスポーツについての見聞を深めるいいきっかけになれていれば幸いです。これからもご愛読のほど、よろしくお願ひ致します。

(鈴木優輔)

編集長
鈴木優輔(人文3年)

会計
藤原真梨子(社工3年)

広報
岩佐拓哉(工シス3年)

編集スタッフ
島根崇志(国際4年)
篠原美奈巳(比文2年)
猪本あかり(比文2年)
高橋健太(工シス2年)
松本 航(社工2年)
吉田健太(資源2年)
岡崎純豊(比文2年)
西村海星(比文1年)
小枝香菜子(比文1年)
鈴木里香(比文1年)

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)

発行人/若木祥太

編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp

責任者/鈴木優輔(編集長)



ラグビーワールドカップ2015 159月17日(11月1日)がイングランドで行われ、日本はグループリーグで史上初となる3勝を挙げた。筑波大からは福岡堅樹選手(情報科学4年、福岡・福岡高)が出場した。

各グループ2位以上が決勝トーナメント進出となるグループリーグ。日本は初戦から歴史的な試合を繰り広げた。相手は世界ランク3位の南アフリカ。前半8分、その格上相手にまず五郎丸歩選手(ヤマハ発動機)のPGで先制する。直後、南アフリカにトライを決められ逆転されるも、すぐさまキヤブテンのリーチマイケル選手(東芝)のトライで再逆転する。その後再び南アフリカにトライされ、10-12と2点リードされて前半を折り返す。後半は、トライやPGで両者が点を取り合う、進退の攻防が続く。徐々に南アフリカに焦りが見えてくる中、日本は冷静に自分たちのプレーを貫く。そして、南アフリカ3点リードの後半ロスタイム、日本は敵陣深くのPKのチャンスでスクラムを選

択。全員で執念深くボールを繋ぎ、最後はカーン・ヘスセス選手(宗像)が左隅にボールを叩き込みトライ。ラストワンプレーをものにした日本が劇的な大逆転勝利を収めた。この試合で世界中に衝撃を与えた。

第2戦はまたも強豪のスコットランド。この試合には福岡選手が先発出場した。2年前のスコットランド戦で2トライを奪った実績からの大抜擢だ。前半は、第1戦で金星を挙げた勢いに乗る日本を警戒してか、スコットランドはPGで確実に点を取っていく慎重な滑り出し。日本もレイ・マフィ選手(NTT)のトライなどで応戦し、僅差で後半に突入する。しかし、後半ではここまで大活躍のマフィ選手が負傷退場となったのを皮切りに、スコットランドの猛攻を受けてしまう。初戦から中3日と疲労も目立ち始めた、南アフリカ戦で見られた華麗なパスワークが影を潜めた。最終的には35点差をつけられてしまい、連勝はならなかった。福岡選手も決定的なランは披露できず、悔しい敗

戦となった。第3戦の相手は難敵で、シヴァウと呼ばれる試合前の儀式で有名なサモアだ。これを落とすと決勝トーナメント進出の可能性がなくなり後がない。開始早々五郎丸選手のPGで先制すると、反則がさむサモアに対して日本は冷静な試合運びを見せる。前半終了間際の山田章仁選手(パナソニック)の芸術的なダイブでトライを決めるなど、サモアを圧倒。終わってみれば26-1と快勝し、準々決勝に進出に望みを繋いだ。日本代表がグループリーグで複数回勝利するのは初めてのことであった。

グループリーグ最終戦はアメリカ戦。この時点で決勝トーナメント進出の可能性はなくなっていたが、日本は素晴らしい激闘を演じた。まずアメリカにPGで先制されるも、すぐさま松島幸太郎選手(サントリー)のトライで逆転する。その後もワールドカップ初出場の藤田慶和選手(早稲田大)のトライなどで得点を重ねた。しかし、アメリカもしぶとく食らいつき、点差がな

かなか広がらない。一時は7点差まで詰め寄られるも、最後は五郎丸選手のPGで勝負を決めた。初戦の金星を筆頭に、世界と堂々と渡り合えることを証明したラグビー日本代表。間違いなく今大会で最も会場を沸かせた。次のワールドカップは日本で行われる。筑波大には、今大会出場した福岡選手や、今回は怪我で残念ながら出場できなかった山沢拓也選手(体育3年、埼玉・深谷高)など好選手が揃っている。きっと、筑波大出身の選手が4年後の日本を盛り上げてくれるだろう。

日本代表の試合結果
第1戦 日本 34-32 南アフリカ
第2戦 日本 26-15 サモア
第3戦 日本 28-18 アメリカ
(岩佐拓哉)



揺れる代々木体育館。頭上にはためく日章旗。飛び交う声援、怒号。セッターと目が合う。来る、直感する。すべてを相手のコートへ、叩き込む。湧き上がる拍手、歓声。それらを我が物として噛み締めながら、渾身の雄叫びとガッツポーズを決める。どんなに気持ちいいだろう。すべてのバレーボールが一度は夢見るその光景を今秋、一人の筑波大生が現実のものへと変えて見せた。

9月8日から23日にかけて行われた、FIVBワールドカップバレーの男子日本代表に、筑波大学男子バレー部から高橋健太郎選手(体育3年、山形・米沢中央高)が選出された。今年4月には、男子日本代表の南部正司監督が、高橋選手を含めた若手4選手を日本代表の次世代の中心選手としての期待を込めて、「NEXT4」と命名したばかり。今年ポジションをミドルブロッカーから変更し、日本代表の中で最高身長、ウイングスパイカーとなった高橋選手にもかかる期待は当然大きい。試合会場ではNEXT4をモチーフにしたアニメが流されるなど、人気も急上昇中だ。

日本代表の大会成績 6位(12チーム中、5勝6敗)
(篠原美奈、高橋健太郎)

筑波スポーツ

平成27年11月27日(金) 第163号

題字: 中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部OB)

男子ハンドボール部

秋季リーグ

2015

9月中旬に国士舘大学で行われた、男子ハンドボールの秋季リーグ。筑波大学男子ハンドボール部は念願の優勝を果たした。念願というのも、主将・服部友郎選手・体育4年、愛知・愛知高が入学してから、優勝というタイトルを手にしたのは初めてだった。

まず、藤本元監督にお話を伺った。藤本監督は4年前から筑波大学の監督に就任して、現在の4年生と共に歩み、今の男子ハンドボール部を作り上げてきたといっても過言ではないだろう。そんな藤本監督に秋季リーグを振り返っていただいた。これを勝つたという勝利という試合で、いい流れができていた。リーグ戦では自力がじわじわと出ていくものだ。指導の面から、技術、フィジカルの面からもその力がついてきているように思う。

また、藤本監督はハンドボール部への思いも語ってくれた。「勝つだけではなく、これから日本のハンドボールを変えていきたい。力強い言葉が響いていた。そして、選手たちへも「このハンドボール部で人生の財産を作てほしい」と自主練をする選手の姿を見つめながら優しく話していたのが印象的だった。

次に、主将の服部選手とチームの司令塔である田中圭選手(体育3年、福井・北陸高)に話を伺った。

初めに、優勝した時の気持ちについて「とにかく嬉しかった」と両選手ともにこやかに話してくれた。優勝できた要因について何うと「チーム力」という言葉が真っ先に飛んできた。「筑波大のハンドボール部はフィジカル体の筋力」を売りにしており、攻撃でもディフェンスでも組織として動くことができた」と田中選手は言った。服部選手からは、「藤本監督の言葉を借りて言うならば、自力だけではなから、技術や知識の蓄積、また個々に強い選手が集まった上でチーム力を発揮することができた」と、チームをまとめる主将らしい言葉を聞いた。

秋季リーグを振り返ると、7勝0敗2分と度も負けていない。初戦は春季リーグでも対戦した早稲田大学との戦い。「この試合に焦点を当てていた」と服部選手。というのも春季リーグで対戦した時には控えの選手を中心とした、いわゆるBチームを出したが、筑波大は負けた経験があった。今回は40対28と快勝という流れが生まれたのだ。またほとんどの試合が接戦の勝利だった。このことについて、どのような気持ちで戦っていたのか伺ってみた。田中選手は「これまでの積み重ねで勝つ自信があった。どうせ最後は勝つだろうと余裕があった。落ち着いていた」と強気でありながら冷静さを保っていた心境だと振り返った。

「ハンドボールをもっと知ってほしい。見に来てほしい」と両選手は語った。練習中の彼らのプレーを見た筆者は、めまぐるしく変わる攻防、スピードなプレーの連続、気迫あふれるその場の雰囲気、目を奪われた。実際に見なければわからない魅力がそこにはあった。ぜひとも試合に足を運び、彼らの応援をしたいものだ。応援は選手たちの背中を押すこともあるのだから。

最後に今後の目標について伺った。「インカレ優勝」と両



(小枝香菜子)



選手は口をそろえて答えた。インカレではトーナメント戦のためリーグ戦とは味違う。藤本監督の言葉を借りて言うならば、自力だけではなから、技術や知識の蓄積、また個々に強い選手が集まった上でチーム力を発揮することができた」と、チームをまとめる主将らしい言葉を聞いた。

秋季リーグを振り返ると、7勝0敗2分と度も負けていない。初戦は春季リーグでも対戦した早稲田大学との戦い。「この試合に焦点を当てていた」と服部選手。というのも春季リーグで対戦した時には控えの選手を中心とした、いわゆるBチームを出したが、筑波大は負けた経験があった。今回は40対28と快勝という流れが生まれたのだ。またほとんどの試合が接戦の勝利だった。このことについて、どのような気持ちで戦っていたのか伺ってみた。田中選手は「これまでの積み重ねで勝つ自信があった。どうせ最後は勝つだろうと余裕があった。落ち着いていた」と強気でありながら冷静さを保っていた心境だと振り返った。

「ハンドボールをもっと知ってほしい。見に来てほしい」と両選手は語った。練習中の彼らのプレーを見た筆者は、めまぐるしく変わる攻防、スピードなプレーの連続、気迫あふれるその場の雰囲気、目を奪われた。実際に見なければわからない魅力がそこにはあった。ぜひとも試合に足を運び、彼らの応援をしたいものだ。応援は選手たちの背中を押すこともあるのだから。

最後に今後の目標について伺った。「インカレ優勝」と両

女子弓道部



はベスト4という結果だった。が、今年はそれ以上の結果、優勝を目指していきたい。」と目標を掲げた。具体的には、現時点では王座に出場できるチームではあるが、優勝できるチームではまだないため、残りの二週間の練習で、どれだけ自分たちに厳しく追い込んでいくかが鍵だといふ。

一年生の頃から活躍されてきた今林選手。以前はがむしゃらに的だけを求めて弓を引いていたが、今は主将となり後輩の手本となる立場になつてから、弓に真剣に向き合うようになり、弓道に対する心構えから変わってきたという。筑波大学の弓道部は数ある流派の中で日置流の流れを汲んだ練習を行っている。部員の弓道経験者の多くは日置流の射とは違った射法を学んできた方も多く、初め戸惑いを感じる部員も多かったそう。今林選手も違う射法を学んできた部員の一人だが、新しい競

技を始めるようで楽しかったが、今年はその結果、優勝を目指していきたい。」と目標を掲げた。具体的には、現時点では王座に出場できるチームではあるが、優勝できるチームではまだないため、残りの二週間の練習で、どれだけ自分たちに厳しく追い込んでいくかが鍵だといふ。

一年生の頃から活躍されてきた今林選手。以前はがむしゃらに的だけを求めて弓を引いていたが、今は主将となり後輩の手本となる立場になつてから、弓に真剣に向き合うようになり、弓道に対する心構えから変わってきたという。筑波大学の弓道部は数ある流派の中で日置流の流れを汲んだ練習を行っている。部員の弓道経験者の多くは日置流の射とは違った射法を学んできた方も多く、初め戸惑いを感じる部員も多かったそう。今林選手も違う射法を学んできた部員の一人だが、新しい競



(猪本あかり)

女子バレーボール部

圧倒的実力!

バド・女子

春秋連覇

9月から10月にかけて2015年秋季関東女子大学リーグ戦が行われた。女子1部において筑波大学は春季リーグに続き優勝を果たした。

今回は、女子バレー部の代表として、本間真樹子選手(体育4年、宮城・古川学園高等学校)、朝日優衣選手(体育3年、岐阜・県立岐阜商業高等学校)、萩谷沙也加選手(体育2年、茨城・日立第二高等学校)にお話を伺った。

春季リーグで優勝を飾った筑波大学は、秋季リーグでも、最終戦の東海大戦に臨むまで8試合連続で1セットも落とさず勝利するという、圧倒的な強さをみせる。その秋季リーグを振り返っていただいたところ、「ブロックを中心に鍛えた夏の合宿の成果が出た。夏の合宿は大きな自信となった」と萩谷選手は話す。また朝日選手も「夏の合宿でチームとして1丸となった。チームとして1点を取っていく意識が芽生えたのは大きかった」と話してくれたように、夏の合宿がチームをレベルアップさせた大きなターニングポイントであったことは間違いがない。

春季リーグで優勝したがそこで立ち止まらずに、夏合宿を通して弱点を克服し、チームとしての連携を深めたことが、更なる進化につながったのであろう。そしてその結果が、8試合連続で1セットも落とさず勝利という快挙として現れたのだ。

また本間選手は、秋季リーグを振り返る際に、最終戦の東海大戦は避けては通れないものであると話す。「リーグが始まってからセットを一切落とさず連勝を重ねてきた中で、東海大戦ではじめてセットを落としてしまった。それまでの戦いで勝つのが当たり前であり前提という意識が定着してきてしまっていたので、セットを落とすという段階で崩れてしまったのだと思う。いきなり大きなプレッシャーが伸び掛かってくる。シャワーが伸び掛かってくる。今後は戦いの中でもちろん勝ち続けるということもベストであり理想となるし、そうした勝者としての意識は忘れてはいけないが、逆境への対応も同時に考えていかなければならない」と語ってくれた。

このように圧倒的な強さを誇り、春秋リーグを連覇したにも関わらず、三選手とも反省点を話してくれた。この謙虚な姿勢が、チームを連覇に導いた大きな要因かもしれない。

そして今後の目標について3選手に伺った。現チームとしては今後、2015年天皇杯皇后杯と2015年全日本バレーボール選手権という、二つの大きな大会を控えている。前者においては先日、関東ブロック予選を突破し、ファイナルラウンドに駒を進めた。天皇皇后杯については萩谷選手は「高校や他の大学などだけでなく、普段試合をすることがない実業団とも試合をできる貴重な機会。この機会を生かして今後に繋げていきたい」と答えてくれた。

さらに全日本バレーボール選手権に懸ける想いは3選手とも強いようだ。全日本バレーボール選手権、通称全カレ優勝、つまり日本一が最大の目標である。3選手とも口を揃えて話してくれた。

中でも引退が近く4年生の本間選手は、「優勝、日本一が4年間の目標。今の自分たちは勝てる力、優勝する力が十分にあると思っている。実際に春秋のリーグでも結果は出してきた。修正すべき点は修正をしつつ、自信を持って臨みたい」と強い意気込みを語ってくれた。

春秋リーグ連覇を果たし、更なる成長を続ける女子バレー部。今後天皇皇后杯、全日本バレーボール選手権という大きな大会に臨んでいく彼女たちから目が離せない。(西村海星)



女子バドミントン部

筑波大学女子バドミントン部が快挙を成し遂げた。東日本学生バドミントン学生選手権大会団体・個人ダブルス優勝、関東秋季リーグ優勝、全日本学生バドミントン選手権大会団体連覇・個人ダブルス優勝と様々なタイトルを獲得した。

今回、主将の井上亜沙実選手(体育4年、熊本・八代白百合学園高)、ダブルス相手・加藤ベア(加藤美幸選手・体育2年、岡山・倉敷中央高)にお話を伺った。

春・秋季リーグの制覇について、「挑戦者として迎えた春リーグとは異なり、連覇がなかった秋リーグは対戦相手に研究され対策を取られたいうでの戦いであつたので、連覇を果たすことは難しいものだった。そのなかでも自分たちの目標を果たすことができた」と井上選手は語った。

両リーグで最優秀選手賞を手にした加藤選手は「秋リーグはMVPを取ることよりも自分が2本出ることの責任を強く感じていた。大会が続く、精神的にもキツイ場があったがこれまでの積み重ねが重なるにつれて繋がっていく。春・秋共に10戦9勝という結果だったので来年は10勝して今年の悔しさを晴らしたい」と来年への課題も話してくれた。

さらに、全日本学生バドミントン選手権大会連覇という偉業を達成したことについての感想を伺った。井上選手は「団体で一番大きなタイトルを取るの今年最大の目標だった。全員がそこに強い想いを持っていてそのうえで勝利をつかむことができて嬉しい」と答えてくれた。個人ダブルスで見事優勝した加藤選手は「ペアを組み始めて2年目で優勝できたことは二人の自信にもなっている。これから先の2年間にも繋がる大きなタイトルになった。1年生の頃は勝つことだけを考えて試合をしてきたが、二年目になって自分たちがこれまで目指さなければならぬのが見えてきて、東日本をとって迎えたインカレだった。私達自身優勝を意識していたし、まわりからのプレッシャーも感じていたが、二人で乗り越えて優勝を掴めたことはとても嬉しかった」と振り返った。

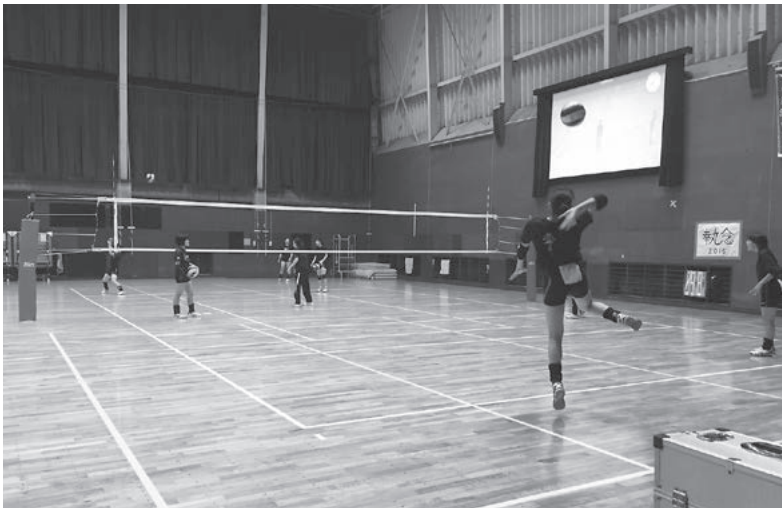
シーズン後半になるにつれて相手に研究され勝てない試合があったり、立て続けに大会が行われるなど、気持ち的にも状況的にも厳しい戦いだつたが、苦しい中でも勝利を飾れる強さが筑波大学女子バドミントン部にはあった。彼女たちの強さとは何か、それはこの大学にも負けない練習量である。特に主要の大会前の夏休みで重ねたトレーニングや練習が今の自分たちの自信につながっているようだ。さらに男子選手がヒップテイクパートナーとなって練習ができることで技術が向上していること、自分たちを客観的に分析し弱点を克服しようとする目標を持つ練習に臨んでいることが彼女たちの強さである。「これらのタイトルを自分たちの力だけで手に入れることはできなかった。指導の先生、男子の選手のおかげで成し遂げられた結果だった」と二人の選手は感謝の思いを口にした。

全日本総合バドミントン選手権に向けて加藤選手は「昨年は会場の雰囲気にもまれて自分たちの力が出せずに終わってしまったが、今年は学生代表として学生も実業団と戦えることを証明したい」と力強く語ってくれた。今後女子バドミントン部の活躍から目が離せない。(鈴木里香)

筑波大学女子バドミントン部の2年間にも繋がる大きなタイトルになった。1年生の頃は勝つことだけを考えて試合をしてきたが、二年目になって自分たちがこれまで目指さなければならぬのが見えてきて、東日本をとって迎えたインカレだった。私達自身優勝を意識していたし、まわりからのプレッシャーも感じていたが、二人で乗り越えて優勝を掴めたことはとても嬉しかった」と振り返った。

シーズン後半になるにつれて相手に研究され勝てない試合があったり、立て続けに大会が行われるなど、気持ち的にも状況的にも厳しい戦いだつたが、苦しい中でも勝利を飾れる強さが筑波大学女子バドミントン部にはあった。彼女たちの強さとは何か、それはこの大学にも負けない練習量である。特に主要の大会前の夏休みで重ねたトレーニングや練習が今の自分たちの自信につながっているようだ。さらに男子選手がヒップテイクパートナーとなって練習ができることで技術が向上していること、自分たちを客観的に分析し弱点を克服しようとする目標を持つ練習に臨んでいることが彼女たちの強さである。「これらのタイトルを自分たちの力だけで手に入れることはできなかった。指導の先生、男子の選手のおかげで成し遂げられた結果だった」と二人の選手は感謝の思いを口にした。

全日本総合バドミントン選手権に向けて加藤選手は「昨年は会場の雰囲気にもまれて自分たちの力が出せずに終わってしまったが、今年は学生代表として学生も実業団と戦えることを証明したい」と力強く語ってくれた。今後女子バドミントン部の活躍から目が離せない。(鈴木里香)



栄光を、その手に。

